

# 月刊 高校生

3

特集 社会・進路・人生を考える場をつくる

新社会人へのメッセージ ● 若菜俊文

自信に満ちた「マルチ人間」になろう!

実践 ● 伊藤賢典 + 山本祥子

「自分」や「社会」を見つめる修学旅行

実践 ● 長谷部 晃

生徒はゼネコン汚職をどうとらえたか

考察 ● 樋渡直哉

社会に目を向ける若者は“善良”か?



高校出版



# “SAFER SEX”の翻訳 によるエイズ学習

秋山 繁治

岡山県・私立清心女子高校教諭

## 授業の枠にとらわれたくない◎

学校という囲いのなかで暮らしていると、教える側と教えられる側という立場や、指導する側と指導される側という立場が存在することを当然のことのように受け入れ、疑わなくなってしまうている自分自身を感じる。

そして、このような上下関係のなかで、教師は、自分が教える内容を十分に修得しているか、せめて生徒より修得しているということと授業を成立させている。

しかしながら、よく考えると、修得しているという建て前も、多くの場合、もろく崩される危険性をはらんでいる。教科の授業でさえ、本当に生徒が何でも質問できる時間があり、生徒が授業に参加し、積極的に質問する気があれば、教師が行き詰

まる場面が出てくることは想定できる。

しかしながら、実際の高等学校では、そのような状態はなかなか起こらない。ほとんどの教師は教科書をこえない範囲で教え、生徒のほうも、教科書の範囲をこえないようわきまえた質問しかない。

テレビでやった歴史的な社会問題の特集番組などを見せても、一心に教科書と問題集から目を離さない生徒もけっこういる。何が知るべき範囲かをす早く判断し、無駄なことはしないという行動である。物事の価値を効率化と経済性という座標だけで測れば、教科書の範囲をこえない姿勢はきわめて好ましいと言える。しかしながら、この効率的な授業を素直にすばらしいと認めるには疑問がある。指導事項があり、学習活動があらかじめ計画され、留意点も想定されたパターンの授業だけで本当

によいのだろうか、という気になってくる。

例えば、エイズが社会問題となり、一九九二年一〇月に、全国の高校生にパンフレット『AIDS正しい理解のために』が配布された。そして、教師には『エイズに関する指導の手引き』が配布された。そのなかには保健・生物・ホームルームでの具体的な実践例が掲載されており、また指導事項、学習活動、留意事項がそれぞれ記述されている。

この本については、いままで問題視していなかった多くの教師にとっては、状況を知らせるだけでも役に立ったという点で、全面的に否定しない。けれども、「人権を教材とする社会科の展開例がない」とか、「コンドームについて適切に扱っていない」とか、いろいろな問題点があると指摘されている。

一度、原点に戻って、生徒とともに

に学習するような、枠にとらわれない試みがあってもよいのではないかと思つた。

生徒は一応、ホームルームの性教育の時間や生物、保健などの時間に学習し、エイズについてぼんやりとした知識は持っているはずである。教師から一方的に説明するだけでなく、生徒が参加する試みを考えてみようと思つた。

### 実践の発想と手順・経過◎

ここで紹介する試みは、何でもない翻訳という作業をクラスでやったというだけのものであるが、そこから自分自身学んだことを報告しようと思う。

一九九〇年の文化祭で、担任していた高校二年生のクラスでは、いま社会的に問題となっていることに対する生徒の意見を、教師に負けない

内容で主張しようということになった。

文化祭までは少々苦勞しても、文化祭当日は自由に行っていたということで、ジャンル別に分けてワープロで打ち、製本し、一冊の本にする、ということでもまとまった。具体的には、クラスを六つに分け、グループごとにテーマを決めて、原稿を共同で書き上げることを目標にした。

六月からテーマを決め、夏休みまでに資料を集め、夏休みに原稿を書き上げた。

八月末の一週間の補習授業期間にワープロ原稿を完成し、順番に並べた状態で製本所へ持っていった。

一冊の製本料約一〇〇円で依頼し、最終的には一二二ページの本が出来上がった。

内容は、「臓器移植」「これからの女性のライフスタイル」「音楽はどのようにして始まったか」「校則と



は「エイズ」「医療事情」「老人性痴呆症」などである。

いろいろな本からの引用も多く、生徒の完全なオリジナルとは言えないものの、この取り組みを機会に、医療系の進路を考える生徒も出てきたりした。

このことをきっかけに九二年度、さらに、高校三年生の生物の授業のなかで、三クラス約一〇〇名全員で、英語のエイズについてのペーパーバックを翻訳することを試みた。

書店の洋書のコーナーをさがしたりしたが、なかなか適当なものが見つからなかった。

結局、夏休みに、ニュージーランドやアメリカにホームステイに行く生徒や教師に、適当な本や資料があったら購入してもらおうように頼んだ。そのなかから『SAFER SEX (WHAT YOU CAN DO TO AVOID AIDS)』が選ばれた。

私自身、英語の教師でもなければ、エイズの研究者でもない。私と生徒の違いと言えば、少し生徒よりエイズや性教育についての本を読んでいくというだけだ。自分自身も作業のなかで知識を得、学習してみようと思っただ。

実施方法は、次のとおりである。

① 本文の約一五〇ページを、生徒一人当たり一、二ページになるように、きりのいいところでパラグラフで切る。

② ルーズリーフを一人二枚ずつ配り、一枚に英文を貼り、一枚を翻訳用を使うように指示する。

③ 授業二時間を使って翻訳作業をする。

※翻訳する場合、自分の分担個所と前後の関係がわからないと訳しにくいので、相互で相談して調整するように言うおく。

※特別な用語(専門用語や俗語)について意味がわからないときは、授業のなかで自由に質問する。

※翻訳のために辞書などで調べたメモは、そのまま残しておく。

④ 提出されたルーズリーフを綴じてまとめる。

⑤ 通読し、校正して用語を統一する。

⑥ ワープロで打ったのち、英語教師にも相談して校正する。

⑦ 印刷後、綴じることだけを製本所に依頼するので、折り込みなどの作業をする。

この活動のなかで、生徒から性にかかわる特殊な言葉についての質問を受けたり、楽しそうに取り組んでいる姿を見ていると、通常の授業にはない打ち解けた空気が流れているを感じた。

ほとんどが大学受験を目の前にした三年生の時期であるが、「エイズについての洋書を読めば、英語力と知識の両方が得られるじゃないか」ということで、予想外に盛り上がったものになった。

父親と一緒に訳したという生徒もいた。また、英語科の教師に質問した生徒もあり、関係するはめになった方々には大変お世話になった。資料1は、翻訳後の生徒の感想(試験答案より)である。

製本所の方は、無理なお願いを引き受けてくださった。「印刷会社から製本所に依頼されることが多いので、一般の方は、製本会社という存在をあまり知らないのです。よく直接頼んでみようと思われましたね」と言われた。こちらのページの折り方が雑で、「会社の名前があるから雑な仕事はできない」と、一緒に夜中まで手伝ってくださった。

最近よくエイズの事を耳にしたりする。  
もう人事ではない。  
日本人はエイズについて正しい知識がないと言われる。  
私もちゃんとした事をよく知らない。クラスに「エイズコーナー」というのを友達で作っていろんな記事をはってくれているのでそれを読んでいたけど、エイズに対する偏見がすごいというのがわかる。知識がないから、人事だと思っているから、その偏見があるんだと思う。私の身近にもエイズ患者がいたらどうだろう。そういう時でもちゃんと対応できるように正しいエイズに対する知識を持つておかないといけない。誰よりも傷ついて苦しんでいるのはエイズになった人だと思われ。ここ2、3年間にエイズ患者の増加が著しいのは、自分には関係ない、そういう思いをしている人がたくさんいるからだろう。患者側というの、私たちがみんなに問題を、セックスするの、気をつけなければいけない。  
とにかく早く日本人全体が、世界の人たちがエイズに対して正しい知識を持つことが大切だと思われ。私も興味はあるからこれからも「エイズコーナー」といって見えていくつもりだ。  
偏見がある日本で私もそういう社会を作っている一人である。でもそれは悲しいことだと思われ。一人一人が偏見をなくそうと努力しないといけない。  
エイズ患者にも希望を持たせてあげたい。

資料1 生徒の感想

完成した翻訳本は、卒業式の当日に生徒の手に渡った。資料2(四四ページ)は、完成した本の一ページである。

### 未来につながる学習体験とは◎

オーストラリアに留学した卒業生から手紙がきた。資料として、現地の新聞記事(資料3・四五ページ)が同封されていた。

「先日、オーストラリアの『The Sydney Morning Herald』という新聞のなかに一つの記事を見つけました。それは、日本の病院の血友病やエイズ患者に対する対応のしかたについて書かれたものですが、とてもひどいものだと思います。この記事を読んだホストのお母さん(日本人)は、日本の病院に対して憤慨し、また絶望していましたし、これを見たほかの人々も同じように感じている

と思います。

saturday, April 17, 1993

Scandal rocks Japan over AIDS cover-up

For a decade, Japanese blissfully believed AIDS was a "gaijin" disease among dirty foreigners.

Now they are being shocked by some horrible medical truths.

(見出しとリード部分)

(エイズ隠しに関するスキヤンダルが日本を揺るがせているーこの一〇年間、幸せなことに日本人はエイズという病気は淫らな「外国人」の病気であると信じていた。ところが現在、日本人は恐ろしい医療の実態に衝撃を受けている)

卒業して遠く離れたところに生活しているのに、私のことを覚えていてくれ、また私の取り組みがきっかけで興味を深めてくれて、うれしかったです。

卒業していく生徒たちは、私たち教師よりもっと自由に、もっと大きな社会に出ていく者も多いだろう。日本とは違った文化のなかで過ごすことも、私たちの時代より多くなると思われる。

そんなときに本当に役立つことは何なのか。

それは、自分で解決したというささやかな体験だと思う。

教師自身も日常の枠組みを離れて、たまにはゲームのように生徒と一緒に、気楽に学習者の立場で授業を組み立ててみてはどうだろうか。そこにはきっと、授業する側にとって新鮮に感じられるものがあり、学習する側にとっては、本当に未来につながる学習体験があるような気がする。何年かが経ち、どんな内容を学んだかは忘れても、学習したという体験だけは心の奥底のほうに生き残っている、そんな授業ができたらと思

う。

言葉に反映される翻訳者の内面◎

私たちが翻訳に取り組んだ本の原書が、翻訳されて出版されていた（私たちが取り組んだ本は、ニュージランドで購入したオーストラリア版ということ、原書とは若干異なるところがある）。日本での書名は『マジックジョンソンのエイズにかからない方法』（集英社）になっている。

どうせ翻訳本が出るなら、何カ月もかけて訳すことは無駄だったのではないかという意見もあるかもしれない。

しかし、生徒と生物の教師でつくった直訳も、読みにくいかもしれないが、本当にいいものができたと感じている。

同じ曲でも演奏者が違えば、それ

ぞれ違った印象を与えるように、原文は同じでも翻訳という作業の結果できた文章もまた、翻訳者の内面が反映するものだと思う。

例えば、集英社版では“bisexual”を「両刀づかい」と訳してあった。これは、バイセクシャル（両性愛者）への蔑称である。決して高校生はそれのように訳さない。また、昨年度までのエイズサーベランス委員会のエイズ発生状況報告の危険因子の欄に、「異性間的接触」と「男性同性愛」という言葉が並べてあった。前者は人間の一つの行為を表す言葉であり、後者はアイデンティティの一面を表す言葉である。

言葉にはいろいろな問題点が隠されている。逆に言えば、言葉には、本当に大切な気持ちを注ぎ込める可能性もある。学びながら、自分自身成長できたらと思う。

翻訳した本のなかに、次のような

個所がある。

「Many people have been taught homosexuality is a sin.If that has been your upbringing, remember that the very same religious teachings also tell us that we are all sinners and are obligated to give the same loving attention to others that would want for ourselves.

（同性愛は罪だと教えられた人たちがたくさんいます。あなたが子ども時代にしつけられたなら、それと同じ宗教の教えが、われわれはみな罪人であると言い、またわれわれのために他人に欲するごとく同じ愛を与えるようにしなさいと言っているのを思い出さない。生徒訳による）」

学校のなかでは、立場は違うことはあっても、人間として教師と生徒は、互いに人権を大切に作る仲間でありたいと思う。

「A MESSAGE FROM EARVIN "MAGIC" JOHNSON」

1991年11月7日、血液検査でHIVに感染していることが判明したため、私はプロバスケットボールから引退しました。そのHIVというウイルスとはエイズを引き起こすウイルスのことです。

私がHIV抗体検査の結果を受け取ったのは、高校時代からの恋人であったクッキーと結婚してまだ二カ月たらずしかたっていないときでした。彼女が妊娠しているということを私達が知ってからたった7週間しかたっていないときでした。検査の結果が判明する以前の数週間は、私達にとって信じがたい喜びに満ちあふれていました。私達二人は残りの生涯を共に過ごすことをやっとな決心していました。私達は二人が長い間望んでいた家族というものをつくりはじめていました。そんなとき、音をたてて全てが変わっていきました。・・永遠に。私の感染のために、私は知らないうちにクッキーとそしてまだ生まれていない私達の子供を危険にさらしていたのです。幸運にも妻のクッキーはウイルスに陰性でした。

多くの人々は私を英雄と呼びました。というのは私が残りの人生を人々（特に十代の若者）への、HIVについてやHIVからどうやったら自分を守れるかについての教育に捧げることを選んだからです。しかし、一つハッキリさせておきたいのです。HIVに感染したからといって、私は英雄ではありません。私が悪い人物であったとか、汚い人物であったとか、どんな理由があるにせよ、その罪を受けるに値する何かであったためにHIVに感染したのではありません。HIVに感染するに値する人はいません。無防備な性交をしたために私は感染したのです。HIVには私のような人は感染しないと思っていたために感染したのです。もし、時計を逆に回すことができたなら、違った行動をしたでしょう。しかし、もうできません。私は前進するしかないのです。家族や友達の愛や支えと共に、自分のできる限りこの病気と闘うつもりです。そして、私が困難な道から学んだ教訓をあなたがたに伝えるつもりです。

私がHIVに感染していることを世間に公表してからの私はとても幸運でした。たとえ私のひどく悪い知らせを公表してから何人かの人々は思いやりのないこと等を言ったり、書いたりしても一般の人々は私を受け入れ、そしてほとんどの人々がまだ私を愛していると言ってくれました。しかしながら、私は幸運者の一人なのです。エイズ患者を含めてHIV感染者の多くが、同じように支えてもらっていないのです。時には家族や友達にさえ拒絶されることがあるのです。そのような拒絶は感染するというで最も悲惨なことの一つです。

差別することは醜いことです。それは嫌悪感や無知から生まれます。私たちの中であまりにも多くの人が肌の色・宗教・身体障害・性のアイデンティティのために差別された時どう感じるかを知っています。HIVに感染した人たちも差別されてい



# Scandal rocks Japan over AIDS cover-up

For a decade, Japanese blissfully believed AIDS was a "gaijin" disease among dirty foreigners. Now they are being shocked by some horrible medical truths. **BEN HILLS reports.**

**I**T WAS some time in 1987 that Ichiro Tanaka began to feel unwell and was sent by his doctor for a check-up at a local hospital not far from Tokyo. Although he was only 23 and otherwise pretty fit, Ichiro was a hemophilic — a hereditary condition effecting only males, in which the body does not produce the agent needed to make the blood clot.

In the old days, most hemophiliacs simply bled to death at an early age. Even with modern treatment, many suffer from painful deformities of the arms and legs and can wind up in a wheelchair.

Ichiro had been treated since childhood with a product called Factor 8, a clotting factor extracted from human blood and freeze-dried into white crystals. Whenever he had a "bleed" — usually internally, when he knocked a knee or an elbow — his doctor, or his mother, would inject him to stop it before there was permanent damage.

The hospital Ichiro went to ran a number of tests, including one for HIV. With great relief, Ichiro, his wife and young child learned a few weeks later that everything was fine; he did not have the disease, the hospital told them.

Two years went by, and Ichiro — by now losing weight, feverish and desperately worried — went to another hospital. They discovered that he was HIV-positive and must have been for several years. He was now showing the symptoms of full-blown AIDS.

Less than a year later, in December 1990, Ichiro died. A few months earlier his wife learned that he had given the virus to her.

Mr Toshihiro Suzuki, the lawyer representing Ichiro's widow, is convinced that doctors at the first hospital "knew he had the virus and deliberately concealed this from him... they are responsible for his wife contracting HIV."

In Australia, this would be unthinkable. In the US, it would be illegal. But in Japan, says Mr Suzuki, "there is no such tradition as informed consent... doctors think they can get away with anything."

Ichiro's widow is now Plaintiff No 28 (they are identified only by numbers, not names) in one of the biggest damages cases ever mounted in Japan, in which 92 hemophiliacs are suing the Government and five pharmaceutical companies.

They claim they contracted the virus through contaminated vials of Factors



Passport to reality... Japanese are finally getting the message that AIDS is not just an overseas problem.

16,000, which, on a per capita basis, is 40 times as many as Japan.

Why this is, no-one seems to know. Japanese do travel abroad less. There is very little intravenous drug use. The homosexual community is not as conspicuously promiscuous. Condoms are widely used.

However, the disease is now entrenched in the country, and most of the patients are Japanese, not foreigners.

The country's hemophilic community has been ravaged by AIDS in a silent epidemic that has remained hidden until now. More than 200 have died already.

"This is a closed subculture within a closed society," says attorney Suzuki. "That is why it has taken so long for the information to get out. If a case of AIDS is diagnosed, the doctor won't tell the patient, the hospital may refuse to treat him, he will have to keep his condition secret from his friends, even his family."

It's not hard to see why. Fear, ignorance and prejudice are rampant. Half the Japanese polled recently by the Japan Broadcasting Company

employees AIDS tests, and Tokyo's Hokusei Gakuen University has gone to the extraordinary length of refusing to admit any foreign student who does not have an AIDS test; Japanese do not have to be tested.

"The prejudice is very strong... I have told my family, but not all my friends," says Toshi Mitsui, another HIV-positive patient who is taking legal action (Like Ichiro Tanaka, this is not his real name. Only two Japanese AIDS patients have "come out" publicly.)

The story unfolding in Tokyo District Court of how almost half of Japan's 5,000 hemophiliacs were condemned to death is a sordid tale of the Government's failure to protect the public against the greed of drug companies and the medical profession.

Secret memos dragged out of the American pharmaceutical industry in overseas litigation (Japan has no legal "discovery") show that, at least as early as 1982 (less than a year after the first AIDS case was identified), the companies knew that the virus could be transmitted by blood.

much as \$A20,000 a year per patient. Doctors urged hemophiliacs to use more Factor 8, and to inject themselves at home as a "preventative" measure. Couriers used to dump dozens of bottles of it in insulated boxes on people's doorsteps.

"They rounded patients up like milking cows," says Yukio Yasuda, a hemophilic who is president of Tokyo Friends of Hemophiliacs and a lawyer involved in the litigation.

In two years there were windfall profits of about \$A100 million made by doctors and hospitals, as the five companies unloaded their "dumped" Factor 8 on the unsuspecting hemophiliacs. One Tokyo private hospital, which rounded up nearly 300 hemophiliacs, paid off debts of \$A7 million and began a major expansion program with the profits.

"Unsuspecting" is not the right word. Most of the hemophiliacs had known about the possibility of AIDS transmission through blood products since July 1992, when the *Mainichi* newspaper carried a *Washington Post* article about it.

"They begged their doctors to change to domestic blood products, but the doctors refused," says attorney Yasuda.

As early as 1983, at least one of five overseas pharmaceutical companies, Baxter Travenol, had developed a sterilisation technique and was offering Japanese hemophiliacs "safe" Factor 8. But, in the most extraordinary chapter of the story, the Government refused to allow the company to put the product on the market.

For 28 months, the Government's advisory committee, headed by a prominent Tokyo medical professor, Takeshi Abe, insisted there was no conclusive evidence that AIDS could be transmitted by blood products, nor that the sterilised Factor 8 was safe. It transpired later that Professor Abe had received several hundred thousand dollars' worth of assistance from Japanese pharmaceutical groups to establish a clinic.

The real reason the Government refused to act — and endangered the lives of hundreds more hemophiliacs — was to protect the local blood product industry, particularly the huge Japanese conglomerate Green Cross, according to investigator Hirokawa.

"The Japanese companies did not have the sterilisation technology, and if the 'safe' product had been allowed in, it would have given Baxter Travenol a monopoly of a \$US50 million-a-year market," he says.

In July 1985, the Government finally allowed the new product to be used in Japan, although there was still no recall of the infected batches of Factor 8. By then it was too late.

The first AIDS case in Japan was detected that month — not a homosexual or a drug user, but a hemophilic. More cases followed, although doctors probably covered up more than they told.

Doctors lied to their patients, telling young men who did have AIDS they didn't have the virus. They got it from the blood products the

資料3 卒業生の送ってくれた新聞記事(部分)